



あ とびら にじいろ ちょう
開かずの扉と虹色の蝶

ノプロプス
noprops / 原作

くろ だけんじ
黒田研二 / 著

すずら き
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

だけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかつてくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

マロン

シースーという種類の犬で、女の子。美香の家で暮らしている。



ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは叔父・姪の関係。



ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんから受けた裏切りに傷つき、しばらく学校を休んでいたが、先日復帰した。



クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。



あらすじ

この夏、化け物「ブルーデーモン」の攻撃や、クロさんの恐ろしいたくらみに対し、仲間とともに知恵と勇気で何度もピンチを切り抜けてきた、ぼく——タケル。ぼくは犬だけど人間の言葉を全部理解している。ずっとそのことをかくしてたんだけど、いまはモールス信号を応用して、ひろし君にだけ言葉を伝えられるようになったんだよ。おかげで、図書館で寄生型の怪物におそわれた事件では、みんなが脱出するための手助けができたんだ！今日は、ひろし君、卓郎君、たけし君、ナオちゃん、そしてハルナ先生と一緒に、<元気村>にやってきたんだけど……あれ？ あそこにいる女の子、見覚えがあるような……。

目次

11	虹色の蝶	127
10	幽霊だらけ	116
9	音楽室の幽霊兄弟	106
8	黒い霧	089
7	保健室のクロさん	075
6	開かずのとびらの向こう側	065
5	大切な人	049
4	草むらからのSOS	040
3	廃校の怪談	030
2	ナオちゃん危機一髪	018
1	碧奥山の少女	006

12	野犬のすむほら穴へ	136
13	黒い霧の正体	146
14	霧の向こう側	156
15	過去へ!	168
16	あの日の出来事	179
17	ひろし君の後悔	190
18	クロさんの悲劇	201
19	時間をこえた大作戦	210
20	幽霊の正体	222
21	二十年ぶりの再会	241
	ひろしによるなぞの解説	247

1 碧奥山の少女

不意に、風のおいが変わった。

まぶたを閉じ、鼻をひくひくと動かす。

まちがいない。これはキンモクセイの香りだ。

ケージのすき間から窓の外を確認すると、オレンジ色の花が左から右に流れていく様子が見えた。

知ってた？ キンモクセイはオスの木とメスの木に分かれているんだけど、日本に生えているキンモクセイは全部オスの木なんだよ。

ひろし君に教えてもらった豆知識を、つつい披露したくなる。

だから、キンモクセイの実って見たことがないだろう？ 実ができないのに、どうやって増えていくのか不思議に思わない？ それはね……。

いつものぼくなら、さも自分が発見したかのように、得意げに語っていたにちがいない。でも残念なことに、今日は語る相手がどこにもいなかった。

あーあ。

重ねた前あしの上にあごを乗せ、大きなため息をつく。

つままないなあ。

ぼくはひどくふてくされていた。人間だったら、口をとがらせ、不満そうな表情をめいつぱいうかべるのかもしれないが、ぼくにはそれができない。仕方がないので、クーンと鼻を鳴らすことで、このやるせない気持ちを取りのみんなに伝えることにした。

「なんだ、おまえ。いじけてんのか？」

前のシートに座っていた卓郎君がこちらに顔を向け苦笑する。

「しょうがねえだろ。マロンはブドウがりに出かけてるんだからさ」

そう口にする卓郎君も、この場に美香ちゃんがいらないからか少しさびしげだ。

『次は〈碧奥山四合目〉とアナウンスが流れた。ぼくのとなりに座っていたハルナ先生が窓の横のおしボタンに手をかける。すんだチャイム音が鳴りひびき、へつぎとまります』の文字が前方の電光パネルに表示された。

図書館でシルピーと呼ばれる怪物におそわれてからちようど二週間が経つ。

「図書館の周りにはおなかをすかせたブルーデーモンが何体もかくれている」とクロさんはいつ

ていたけれど、その言葉はすべてはつたりだったのか、図書館を脱出したぼくたちが再び怪物と遭遇することはなかった。

あれ以降、だれかがおそわれたという話も聞かない。平和な日々が続いている。ひさしぶりに集まったぼくたちは、バスに乗って碧奥山の中腹を移動していた。

目指すは碧奥山四合目にあるアスレチック施設〈元気村〉だ。

「だれが一番早く巨大すべり台をすべり降りることができるか、みんなで競争しようよ！」
後ろの席のたけし君がはしやぎ声をあげた。

「すべり台はひとりずつ間隔を開けてすべらなくちゃいけないんだよね？ それじゃあ、だれが一番かなんてわからないよお」

ななめ後方からナオちゃんの声が聞こえてくる。

「ご心配なく。そこで活躍するのがこのうで時計だ」

ぼくの位置からたけし君の姿は見えないが、きつと得意げな表情をうかべているに決まっている。たけし君は今朝顔を合わせたときからずっと、父親に買ってもらったといううで時計の話ばかりしていた。

「この時計のストップウォッチ機能を使って、全員のタイムを計れば——」

「おい、たけし。俺たち、今日は遊びに来たわけじゃねえんだぞ」

たけし君のうかれた言葉をさえぎつたのは卓郎君だった。

「(元氣村)のどこかにあるブルースターをクロさんより先に見つけ出して——」

「わかつてる、わかつてるってば」

たけし君が早口でいう。

「だから、みんなで手分けしてちやちやちやつとブルースターを見つけて出したあとで、ゆつくり遊ぼうって話だよ」

「そんなかんたんに見つかるとは思えねえけどな。そうだろ、ひろし？」

卓郎君がとなりの席に声をかけた。バスに乗ってから、ひろし君はずつとだまりこんだままだ。ひとつことも声を聞いていない。でも、だからといって、どこかからの調子が悪いのかな？とか、なやみごとでもあるのかな？とか、そんな心配はしていなかった。バスが発車すると同時に難しそうな本を開いて、熱心に読み始めたことを知っていたからだ。

「おい、ひろしってば。聞いてんのか？」

返事をしないひろし君に、卓郎君は声をあららげた。

「……はい？」

ようやくひろし君の声が聞こえてくる。

「どうかしましたか？」

「ハイキング気分のためしにいつてやつてくれよ。こいつ、さつさとブルースターを見つけて、そのあとはアスレチックで遊ぶ気満々なんだぜ」

「せっかくここまで来たのですから、それもよいものではありませんか？」

「そいつはブルースターが無事に見つかった場合の話だろう？ 〈元氣村〉は広いんだぞ。どこにブルースターがうまっているかなんて、まるでわからないわけだし——」

「手がかりがないわけではありません」

ひろし君は淡々と答えた。ぼくの位置から顔は見えないが、どんな表情で答えたかはある程度想像がつく。

「……え？ そうなのか？」

「あれから市立図書館に通いつめ、古い文献を調べてみたところ、今から二十年前の十月一日未明に、碧奥山で大規模な山火事が発生したことがわかりました。『紅前天体観測所全記録』によると、碧奥山に隕石が落下した日も十月一日未明です。隕石が原因で火災が起こったと考えるのが妥当でしょう」

ひろし君はよどみなく説明を続けた。

「直前まで雨が降っており、しかもほとんど無風の状態だったため、火はほとんど燃え広がらず、ブナの木が一本燃える程度の被害ですんだそうです。燃えたブナの木は危険だということですぐに伐りたおされ、その跡地にほこらができたとのことですが」

「あ……つてことは」

「そう。もし今もほこらが残っているのであれば、その下にブルースターはうまつていると考えられます」

ひろし君がそこまでしゃべったところで、バスは〈碧奥山四合目〉に到着した。

バスを降りると、ハルナ先生がぼくをケージから出してくれた。大きくのびをしてから、周りの景色をぐるりとながめる。大量のキンモクセイに自然としつぽがゆれた。

たくさんの赤とんぼが、ぼくの鼻先をかすめていく。こつちへ来いと案内しているみたいだ。「待て待て、とんぼーっ！」

たけし君はとんぼを追いかけて、〈元気村〉へと続く山道をかけていった。

「たけし君。転ばないように気をつけてね」

とんぼに夢中になって、ハルナ先生の声も聞こえていないようだ。

「あいつ、〈元氣村〉のつり橋が爆発したときは、『もう二度とこんなところに来るもんか』って泣きわめいてたくせに、二週間経つてすっかり忘れちまつたんだな」

とんぼとたわむれるたけし君を見ながら、卓郎君が笑う。

「お父さんには『あそこは危険すぎるから絶対に行くな』といわれたみたいんだけどね」

ハルナ先生がいった。たけし君のお父さんは〈元氣村〉の爆発事件の現場に遭遇したひとりだ。反対するのは当然だろう。

「ハルナ先生がたけし君のお父さんを説得してくれたの？」

ナオちゃんがきく。

「ううん。『おみやげに〈へきまん〉を買ってくるから』ってたけし君がいったら、あっさりOKが出たんだって」

〈へきまん〉は、碧奥山のふもとでしか売っていない人気のおまんじゅうだ。ああ、だからさつき、バスに乗る前におまんじゅう屋さんに寄ったのか。たけし君同様、たけし君のお父さんもおいしいものには目がないらしい。

ぼくたちはたけし君のあとに続き、山道を歩き始めた。ぼくのリードをつかんでくれたのはハルナ先生だ。ときどき目の前を横切る赤とんぼにあいさつしながら、〈元氣村〉へと向かう。

「さっきの話の続きだけど、〈元氣村〉にほこらはあつたのか？ おまえのことだから、もう調べてあるんだろう？」

「ほくのすぐ横を歩きながら卓郎君がいった。」

「結論からいうと、ほこらはありませんでした」

ひろし君が答える。

「〈元氣村〉の管理者のかたに電話をかけて教えていただいたのですが、ほこらは〈元氣村〉を建設するときに取りこわしてしまつたそうです」

「なんだ。だつたら、ダメじゃねえか」

「しかし、ほこらのあつた場所ならわかります。調べてみる価値はあると思いますが」

「なんだか宝探してみたいでワクワクするね！」

「ぼくを小走りで追い抜いたナオちゃん、こちらをふり返つていった。」

「でも、ほこらをこわしたときに、ブルースターまでいっしょにほり返されてしまつた可能性もあるんじゃないかしら？ もしかしたら、そのまま土ごとどこかへ捨てられてしまつたということも……」

「ハルナ先生がそう口にする。もつともな意見だ。」



「そうですね。むしろ、その可能性のほうが高いのではないかと僕は考えています」

「え？　じゃあ、せつかく〈元氣村〉まで行っても、無駄足になっちゃうかもしれないってこと？」

「無駄にはなりません」

ナオちゃんの不満そうな発言を以て、ひろし君は答えた。

「僕たちの目的はブルースターを手に入れることではありません。クロさんの手にブルースターがわたらないようにすることです。すでに廃棄されたことが確認できれば、それは大きな成果だと考えてよいでしょう」

二十年前、ぼくたちの住む碧奥町周辺に落下した大量のブルースター。星の形をしたそ

の金属片の中には、パラサイトバグと呼ばれるイナゴに似た生命体が生息していた。

パラサイトバグが体内に侵入すると、その生物はブルーデーモンへと変異してしまう。

今年の夏休み、化け物がすむとうわさされるジエイルハウスでブルーデーモンに遭遇して以降、ぼくたちは何度もそいつらの仲間におそわれ、危険な目にあってきた。

ブルーデーモンの魅力に取りつかれたネイチャーガイドのクロさんは、自らすすんでパラサイトバグを体内に取りこみブルーデーモン化した。それだけでなく、さらに仲間を増やそうと、パラサイトバグを集めることに必死になっている。

これ以上、青い怪物が町の中にあふれ返ったら大変だ。そこで、ブルースターの落下した場所が事細かに記された本——『紅前天体観測所全記録』をたよりに、ぼくたちはクロさんより早くブルースターを回収しようと考えた。

今は落下地点のひとつ——〈元氣村〉へ向かっている途中だった。残念なことに美香ちゃんは家族旅行に出かけてしまって欠席。当然ながら、美香ちゃんの家族であるマロンちゃんもここにはいない。

あーあ。マロンちゃんといっしょに赤とんぼを追いかけたかったなあ。

ぼくはみんなに気づかれないよう、今度は小さくため息をついた。

と、そのときだ。

ガサガサツと木の葉のこすれ合う音が聞こえた。小さな黒い影がキンモクセイの向こう側を横切つていく。

最初はこの山にすむ野生の動物だと思つた。〈元氣村〉の開発で山を大きく切り開いたために、たくさん動物が姿を消してしまつたと聞いている。でも、そんな困難にも負けず、今もこの周辺でひっそりと暮らし続けている動物は少なからず存在するにちがいない。

だが、動物でないことはすぐにわかつた。

「待つて！」

ハルナ先生のさけび声で、その影が立ち止まつたからだ。

それは幼い女の子だつた。頭にはピンク色のリボン。えりの大きな白いシャツと水玉のスカートを身に着けている。

……あれ？

ぼくは首をかしげた。

この女の子、一度どこかで出会わなかつたつけ？

「あの子は映画館の——」

ひろし君の言葉でようやく思い出す。先月、駅前映画館（エキサイド）で出会った背中に火傷のあとが残る女の子だ。

どうしてこんなところにいるんだろう？ ひとりきり？ おうちの人はどこに？

女の子に近づこうとハルナ先生が一步ふみ出すと、彼女はびくんとからだをふるわせて、森の奥へとかけ出した。

「行かないで！」

ハルナ先生は女の子を追いかけようとしたが、密集して生えたキンモクセイの向こう側へ移動するのはかなり難しい。もたついているうちに、女の子は姿を消してしまった。

「……ユズキ？ ううん、まさかね」

ハルナ先生がそうつぶやいたのをぼくは聞き逃さなかった。

